

## 落人 (道行旅路の花聳)

へ落人も 見るかや野辺に若草の すき尾花はなけれども 世を  
忍び路の旅衣 着つゝ馴れにし振袖も へどこやら知れる人目をば  
かくせど色香梅が花 へ散りてもあとの花のなか いつか故郷へ 帰  
る雁 まだはだ寒き春風に 柳のみやこ後に見て 気も戸塚はと吉  
田ばし 墨絵の筆に夜の富士 よそめにそれと影くらき 鳥のねぐら  
をたどり来る

へ鎌倉を出でてやうくと 此処は戸塚の山中石高道で足は  
痛みはせぬかや

へ何のまあそれよりはまだ行先が思はれて

へさうであるう昼は人目をばはかる故

へ幸いこの松かげで

へ暫しがうちの足休め

へほんにそれがよからうわいなア

へ何もわけ無きうきはらし 憂きが中にも旅の空 初ほとぎす明

近く へ色で逢ひしも昨日今日かたい屋敷の御奉公 あの奥様のお

使ひが 二人が塩谷の御家来で その悪縁か白猿に よう似た顔の

錦絵の へこんな縁しが唐かみの おしの番ひの樂しみに へ泊り

泊りの旅籠やで ほんの旅寝の仮枕 嬉しい仲間じゃ ないかいな へ空

定めなき花曇り 暗きこの身のくり言は へ恋に心を奪はれて お

家の大事と聞いたとき 重きこの身の罪科と かこち涙に目もうるむ

へよくよく思へば後先の 弁まへもなく此処迄は来たれども

主君の大事をよそにして この勘平はとても生きては居られぬ

身の上 其方は言はば女子の事死後の吊ひ頼むぞやお軽さら

ばぢや

へアレまたその様な事言はしやんすか 私故にお前の不忠それ

がすまぬと死なしやんしたら わたしも死ぬるその時はアレニ

人心中ぢやと 誰がお前を褒めますぞへ さこの道理を聞き

分て 一ト先私が在所へ来て下さんせ 父さんも母さんもそ

れはよく頼もしいお方もうこうなつたが 因果ぢやと諦めて

女房の言ふ事もちつとは聞いて呉れたがよいわいなア

へそれ其時のうろたへ者には誰がした みんなわたしがころから

死ぬるその身を 長らへて へ思ひ直して親里へ 連れて夫婦が身を

忍び へ野暮な田舎の 暮しには 機も織りそろ 賃仕事 常の女

子と言はれても 取乱したる真実が へやがて届いて山崎の ほんに

私が ある故に へ今のお前のうき難儀 堪忍してとばかりにて 人

目なければ寄り添ふて 言葉に色をや含むらん

へ成程聞き届けたそれ程迄に 思ふて呉れるそちが親切一と  
先づ立ち越え 時節を待つてお詫びせん

へそんなら聞き届けて下さんすか

へサ仕度しやれ

へアイ

へ身ごしらへするその所へ

へ見付けたへ才お軽も居るな

へヤアへ勘平

へうぬが主人の塩谷判官高貞と おらが旦那の師直公と 何か殿中で ベツちゃくちやくつちやくちやと話合するその中に ちいちゃ刀をちよい と抜いてちよいと斬つた科によつて 屋敷は閉門網乗物にてエツサツサエツサツサ エツサへエツサツサと ぼかしてしまふたサアコレ鳥鶉翻お鴨をこつちへ 鳩鶯葭切ひわだ雁だと孔雀が最後 とつ捕めへちやひつ捕めへちややりやあしねえが 返答は サアサアサツササ勘平返事は丹頂へ

へ丹頂へと呼ばわつたり勘平ふつと吹きだし

へよい所へ驚坂伴内おのれ一羽で食ひ足らねど 勘平が腕の細

ねぶか料理あんばい喰ふて見よエ

へ大手を振げて立つたりける

へエ七面鳥なもちで捕れ

へドッコイ

へさくらへという名に惚れて どつこいやらぬは そりや何故に所詮お手には入らぬが花よ そりやこそ見たばかり それでは色にはならぬぞへ 桃か桃かと色香に惚れて どつこいやらぬは そりや何故に 所詮まへにはならぬが風よ そりやこそ他愛ない それでは色にはならぬぞへ

へサこうなつたら此方のもの 耳から斬るか鼻からそごうかエモ

一層の事に

へアモンそいつ殺さばお詫びの邪魔もうよいわいなア

へへもうよいわいなア

へ口のへらない驚坂は 腰を抱えてこそへと 命からがら逃げてゆ

く

へ彼奴を殺さば不忠の上に重なる罪科最早明け方

へアレ山の端の

へ東がしらむ

へ横雲に

へ  
疇をはなれ鳴くからす かわいい 可愛いの女夫づれ 先は急げど  
心は後へ お家の安否如何ぞと 案じゆくこそ道理なれ。